隠された”日本の宝“杉のストーリーを身に着ける

清水 将勇　茨城／木工家

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催：LEXUS）は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

本プロジェクトは2016年、プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。以来、全国の若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への指定やロックフェラー家主催のチャリティイベントへの出品、上海での国際的な展示会への出品など、目覚ましい活躍を見せている。

3年目となった今回は、全国47都道府県から計50名の若き匠が選出。昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの制作に取り組んだ。

1月24日、東京ミッドタウン日比谷で行われた発表会では、国内外の百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイン関係者などに向けて自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。

プレゼンテーションの様子

また当日は、2019年の新たな取り組みとして、全国の匠と、世界的クリエイター（コラボレーター）が、新たなプロダクトを制作するコラボレーションプログラムを発表。コラボレーターである隈研吾氏（建築家）、廣川玉枝氏（SOMARTA クリエイティブディレクター）、森永邦彦氏（AN REALAGE／代表取締役社長・デザイナー）、辰野しずか氏（クリエイティブディレクター／プロダクトデザイナー）が登壇し、想いを語った。2019年秋頃には、完成したコラボ作品、過去のプロジェクトから生まれた匠たちの作品を披露するイベントを京都の地で開催することを合わせて発表。プロジェクトも一歩一歩進化している。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。茨城県選出の匠、木工家の清水将勇さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

地元の杉を使った作品づくり

茨城県代表に選出された木工家の清水さんは自宅兼工房を石岡市中戸（旧八郷町）に構える。目の前の畑には猪の足跡も見受けられるような自然豊かな地で、妻の文さんと共同で作品づくりに励む。

清水さんが作品に使用するのは地元の杉材。車を15分ほど走らせた場所にある上林製材所で木こりと相談しながら材料を仕入れる。「彼らがいると山が身近に感じられ、作品にかける思いが変わってくる」と受ける影響は少なくない。

「石岡にいるからこそできることをしたい」という思いがある。千葉県柏市出身の清水さんだが、紆余曲折を経てこの地に行き着いた。

幼いころからプラモデルなど「モノ」を作ることが好きな少年だった。都内の理系の大学に進むも、モノづくりへの憧れから、大学卒業後は埼玉県の職業訓練校に入学し職人の道へ。その後、都内の展示会で漆芸家辻徹氏のつくった家具に出合い衝撃を受け、弟子入りした。辻氏の工房がある常陸大宮市では、約2年間の厳しい指導を受けた。

その後は埼玉県の琴屋で職人となったが、試練が訪れる。30歳の時に大腿骨に腫瘍が発見された。手術と療養を経て家族と一緒に茨城県に移住。一度は死をもよぎった大病を経験し、「家族を大事にしたい」と頭に浮かんだのは修行時代を過ごした茨城だった。

清水さんの仕事道具

エリア・コンサルティング

当初は生活の安定を求め、配達員や住宅、保険の営業をして木工の道を一度は離れた。しかし、「モノづくり」をあきらめることはできなかった。県内の木工所に就職し、2012年に現在の場所で独立を果たした。

工房名は「japonica（ヤポニカ）」。由来となった杉の学名「クリプトメリアヤポニカ」はラテン語で「隠された日本の財産」という意味を持つ。木目が美しく、軽くて丈夫な杉は古くは奈良時代から重宝されてきたまさに”日本の宝”だ。

木目の美しさを生かすべく、作品づくりにはこれも古くから用いられてきた技法の草木染めを取り入れている。染料は南天や藍、クチナシ、ローズマリーなどの植物を使い、赤、青、黄、緑、紫などカラフルに染めあげる。

一方、戦後の植林政策で日本中に植えられた杉は、今や「嫌われもの」と清水さんは苦笑する。輸入木材の台頭などで売れなくなり、管理が行き届かなくなった杉林は荒れ放題に。さらには花粉症のイメージもある。

日本にたくさんある杉を使わない手はない、日本の「隠された財産」を隠されたままじゃなく表に出したい―そんな思いを抱きながら、これまでテーブルや椅子などの家具、皿やマグカップなどの器を制作してきた。

作業風景

自然や文化を想起させるアイテムを

本プロジェクトではそんな杉の「ストーリーを身に着ける」ことができる杉草木染めアクセサリーづくりに挑んだ。これまでは主に屋内で使用するものが多かったが、「できるだけ多くの人と共有したい」と外に持ち出してファッションアイテムとして使えるものを目指した。

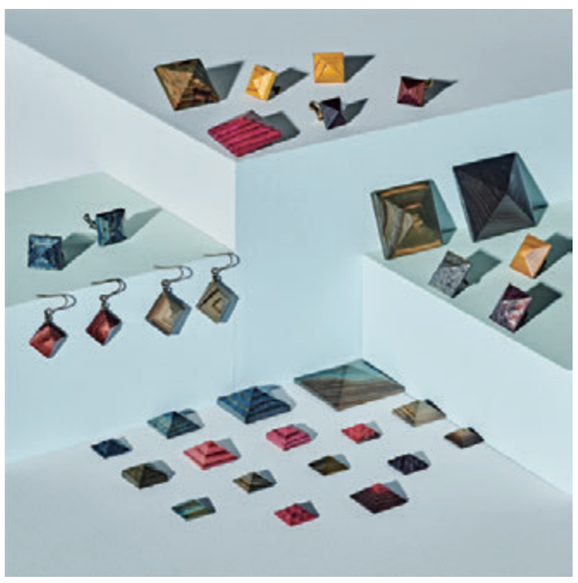
形はカットの仕方で木目が面白く見え、陰影や表情が出やすいよう正方形のスタッズのようなものにした。また、付ける金具によってイヤリング、ピアス、カフリンクス、ピンズなどになり、老若男女問わず身に着けられる。

当初はアクセサリーの種類によってある程度色や大きさを限定することを想定し、試行錯誤するなど悩んでいたが、下川氏とのエリア・コンサルティングが一つの転機となった。

色や大きさ、表面の質感を微妙に変化させ、標本のように並べた約100個の試作品を下川氏に見せると「これだけのバリエーションをつくって、この中から『選べる』っていうのが価値があるんじゃないか」とアドバイスを受けた。

プロダクトにブランド名をつけることの提案もあり、「今まで自分が見えていた世界とはまた違う感じ」と清水さんは感銘を受けた様子で、作品づくりへの意欲を深めた。

完成したプロダクトの名前は「MODE Japonica（モードヤポニカ）」。洗練されたファッション性を打ち出した。


完成プロダクト「MODE Japonica（モードヤポニカ）」

石岡市にある清水さんの工房

発表会では約150種類のサンプルを用意した。アドバイスを受けて、使う人がそれぞれの感性で選ぶことができるようにした。

「手に取ってもらった人が、自然や文化に想像を膨らませ、それが会話になったり、その人の幸せや満足感につながったらいい」と願う。

プロジェクトを通して久しぶりに一つの作品にじっくりと向き合い、「ものづくりの楽しさを思い出した」とほほえむ。一方、出合った他県の匠やサポートメンバーから刺激を受け、「まだやりきれてない部分も課題も見えてきた」と気を引き締める。

「杉の美しさ、感覚を海外でもどれくらい共感してくれるのか試してみたい」と海外進出も視野に入れ、さらなる挑戦を続ける。

種類豊富な作品

広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。「進め！電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。執筆活動の他、京都造形芸術大学副学長、地域・企業のアドバイザー、下鴨茶寮主人などを務める。「くまモン」の生みの親でもある。

1月24日、プレゼンテーションにて

清水 将勇
茨城／木工家

1975年千葉県生まれ。大学で機械工学を学ぶも、手仕事に憧れ木工の道へ。漆芸家辻徹氏に師事。その後琴屋、木工所で職人として務めながら、次第に「杉」に惹かれるようになる。2012年に茨城県石岡市にて独立。草木染めの技法を取り入れ、「軽くて丈夫で美しいもの」を目指して日々製作している。2018年いばらきデザインセレクション知事選定。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT